

〈論文〉 『源氏物語』 浮舟の「尼衣」歌考

山崎, 和子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

106

(開始ページ / Start Page)

16

(終了ページ / End Page)

29

(発行年 / Year)

2022-09-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030166>

〈論文〉

『源氏物語』 浮舟の「尼衣」 歌考

山崎 和子

はじめに

『源氏物語』において浮舟が最後に詠んだ歌は、手習巻で手習歌として詠まれた「尼衣かはれる身にやありし世のかたみに袖をかけてしのばん」(手習⑥三六一¹)である。小野で出家していた浮舟は突然もたらされた「ありし世のかたみ」の衣に触発されて、どの袖を何に掛けて、何を偲ぶのだろうか。歌意を究明し、浮舟物語における当歌の位置づけを考えたい。その上で、浮舟のかぐや姫引用の視点から「尼衣」とかぐや姫の「天衣(天の羽衣)」との関わりを考えてみようと思う。

一 問題点

浮舟失踪の三月から一年が経つ頃、母尼君の孫紀伊守(薫の家人)が小野を訪れ装束の詭えを依頼する。それは薫が催す浮舟の一周忌法要の布施であることを知り、浮舟は「いかでかはあはれならざらむ」とひどく心を打たれる。薫と匂宮の話題を「あはれにもをかしく」も聞き、自分を忘れないでいる薫を「あはれ」と思うにも、母の心中を思いやるが尼姿での対面は憚られる。妹尼の裁縫の求めにも応じず臥している場面である(手習⑥三五六〜三六〇)。

忘れたまはぬにこそはとあはれと思ふにも、いとど母君の御心の中推しはからるれど、なかなか言ふかひな

きさまを見え聞こえたてまつらむは、なほ、いとつつましくぞありける。…(中略)…紅に桜の織物の桂重ねて、「御前には、かかるをこそ奉らすべけれ。あさましき墨染なりや」と言ふ人あり。

尼衣かはれる身にやありし世のかたみに袖をかけたしのばん

と書きて、いとほしく、亡くもなりなん後に、ものの隠れなき世なりければ、聞きあはせなどして、疎ましままで隠しけるとや思はん、などさまさま思ひつつ、「過ぎにし方のことは、絶えて忘れはべりにしを、かやうなることを思しいそぐにつけてこそ、ほのかにあらはれなれ」とおほどかにのたまふ。

(手習⑥三六〇～三六一)

一人の尼が「あのお方にはこのような(紅に桜の織物の桂を重ねた華やかな)装束を差し上げるはずなのに、なさけない墨染(の尼衣)だこと」と嘆息したことで、浮舟は右の手習歌を書き記す。ここで四度も「あはれ」と語られており深い感慨を覚えていた。

古注では当歌を「かゝる装束をみてむかしをしのひたる也」(『細流抄』)など、浮舟が昔を偲んでいる意に解釈するものが多いが、近年の注釈書は、

A:「尼衣に姿の変わってしまったこの身に、今さら昔の形見として、はなやかな衣装をまもって昔を偲んだり

しようか」「もうはなやかな装束に手を通したりしたくない」「反語と見る」(『玉上評釈』)

B:「尼の衣にすっかり変ってしまったこの身に、昔の暮しの形見としてのはなやかな衣裳の袖をかけて、昔を偲びもしようか。「かけて」に、「心に掛けて」の意を重ねる。(『集成』)

A 反語説には他に『全集』『新大系』『鑑賞』『注釈』があり、偲ぶ方向に捉えるB疑問説は『対校』『全書』『大系』『新全集』『人物で読む』もある。これらはいずれも一首全体がまとまりをなし、反語か疑問かを問題としているが、新たに問題になるのがC二句切れの解釈である。井野葉子氏以前にも倉田実氏、清水婦久子氏が二句目での区切れを捉えていたが、最新刊の『岩波文庫』は井野説を全面的に採用している。井野説を挙げてみよう。³⁾

C:「〜にや」の「に」は下の語との「格関係や修飾関係」がないため、文意は「尼衣かはれる身にや。」で切れる。『源氏物語』において文末の「にや」に反語の意はなく、疑問あるいは詠嘆表現である。「袖をかけ」は、「浮舟が今着ている尼衣の袖を伸ばして対象に触れて対象を覆うこと」であるから、「尼衣、変わった身なのか。私が俗世にいた時の形見として華やかな片身ごろに尼衣の袖をかけて偲ぼう。」と「詠嘆しながら疑問を投げかけ」「過去を恋い慕っている歌」

問題は「かはれる身にや」の「に」をどう捉えるかにあ

る。通説は「身に」と位格表示の格助詞と捉え、係助詞「や」は「しのぼん」と呼応し一首全体がまとまりをなすと解釈するが、井野氏は「に」は助動詞で「結びがなく、そこで文末となる」、即ち「身にや。」で文意が切れると言う。

また今一つ大きな問題点として「袖をかけて」の解釈がある。従来は、尼の身に華やかな衣装をまとう・華やかな衣を引きかけるなどと衣を着用する意に捉え、華やかな衣の袖を掛けることも尼衣に変わった身に羽織る様を思い描いている。ところが井野氏は、華やかな衣に尼衣の袖を掛けるという従来説とは逆の新解釈を提示した。

本稿では歌意について次の点から考察を進めたい。

- 1 「身にや」の「に」は位格表示の格助詞と見、係助詞「や」は疑問を表し一首全体を疑い問いかけている。
- 2 「袖をかけて」は形見の華やかな衣に浮舟の尼衣の袖を掛けることである。
- 3 「かたみ」の「しのぶ」対象には特定の人物として薫を捉えている。

- 4 従って歌意は、浮舟が出家し尼衣に変わった身において、昔の形見である華やかな衣の片身に尼衣の袖を掛けて、形見が喚起する薫にひたすら心惹かれて懐かしく思うのか、尼の身において惚ほうか、と自らに疑問いかけている。

二 「身にや」の解釈（一首の構成）

まず、「かはれる身にや」の「に」は格助詞か、断定の助動詞なのか、係助詞「や」は疑問、反語、詠嘆のいずれを表しているのか、一首の構成から検討していこう。『源氏物語』中に「に」に係助詞「や」が下接する例は、形容動詞とされる連用形活用語尾例を含めて508例用いられている。和歌例は浮舟歌を含めて11首ある。

①「いであな憎や。罪の深き身にやあらむ、陀羅尼の声高きはいとけ恐ろしくて、いよいよ死ぬべくこそおほゆれ」

（柏木④二九三）

②この君ねびととのひたまふままに、母君よりもまさりてきよらに、父大臣の筋さへ加はればにや、品高くうつくしげなり。

（玉鬘③九二二）

③めづらかに跡もなく消え失せにしかば、身を投げたるにやなど、さまざまに疑ひ多くて、

（夢浮橋⑥三七八―三七九）

④絶えせじのわがたのみにや宇治橋のはるけき中を待ちわたるべき

（総角⑤二八四）

⑤なほざりに頼めおくめる一事をつきせぬ音にやかけてしのぼん

（明石②二六六）

①は、助動詞「なり」の非融合形「にあり」（格助詞「に」+補助動詞或いは助動詞「あり」に係助詞「や・か・こ

そ・なむ」などを挿入した形であり、「…にやあらむ(ん)」「(94例)「…にやありけむ(けん)」「(19例)や「む」「らむ」「けむ」など推量の助動詞と呼応する例が多い。ここは柏木が女三宮に通じたわが身は罪深い身であろうかと自らに疑い問いかけている。身を疑う例は、大君の死を受け入れがたく思う薫が「かくいみじうもの思ふべき身にやありけん」(総角⑤三三七)と自問する例もある。

②は、文末「なり」は終止形であり、係助詞「や」とは呼応していない。玉鬘の美貌は父大臣(昔の頭中将)の血筋さえ加わるからであろうか、という疑問を挟み込んだものである。③は、副助詞「など(なにと)」によって「浮舟は身を投げたのだらうか」という疑いに幅と含みを持たせる表現である。このような「…にや、…(終止形・接続助詞など)」「…にやと(など)、…」「…にや。」などの形態は、会話や心中思惟、地の文において318例と多数を占める。①と同じく「にやあらむ」の「あらむ」が省略された、或いは「にや」形を認めるとしても、本来はあった「あらむ」が省略されていると考えられよう。

一方、位格表示の格助詞「に」の用途は多岐に解釈されるが、基本的機能は「に」の上接語において下接語の動詞の表す動作や作用が行われることを表し、「において」として、「で」などの現代語に相当する。④「たのみに」の「に」は格助詞で、係助詞「や」が「べき」と係結をなすことで、中君は匂宮を「頼みとせずと待ち続けようか、

それがよかろうか」と、頼みとすることをポイントとして一首全体で自らに疑い問いかけている。

⑤は、浮舟歌と同じく末句を「かけてしのばん」と詠む明石君の歌で、「言」「琴」、「音」には琴の音と泣き声を、「かけて」は関係づける意と心にかけての意を掛詞として「女」からとされたこの歌は、源氏の通り一遍な仮初めの口約束を頼みとすることへの不安を言うともなく口ずさんだもので、源氏はそれを「恨み」「かならずあひ見む」(明石②二六七)と固く約束をする。しかし、それでも明石君は別れのつらさと不安で涙に咽ぶのであった。

この「つきせぬ音にや」の「に」も格助詞であるが、それが「かけ」にのみ掛かり、係助詞「や」と呼応するのであれば、一首の意は音に掛けるのかと疑って、その上で偲ほうと思うことになる。ここは「かけて」を「(音に)かけて、心にかけて(偲ばん)」との掛詞と解することで、明石君は琴の琴といひ加減に言い置く源氏の一言を頼みとして尽きない琴の音に泣き声を加えて、心から源氏をお慕いしようか、と一首全体を自らに疑い問いかけたものと解釈できよう。

「にや」の形での「や」はいずれも反語で解さなければならぬ例は見られず、上接部にポイントを置き疑問を表している。しかもその疑問は、…だろうと思う気持ちもありながら、…だろうかと疑い問いかけるのであり、従来も清水婦久子氏が「軽い疑問やとまどい」を、岡陽子氏も「軽

い疑問」を表すと捉えていたことに類同する。

浮舟歌も⑤のように「に」を格助詞、「かけて」も「(袖を)掛けて、心にかけて(惣ばん)」の掛詞と捉えると、「ありし世の形見に袖をかけて」が挿入部となる。係助詞「やは句末の「ん」と係結をなし、そうだとも思いながら惣ほうかと一首全体への問いかけを表すと解釈できる。

確かに「にや」で一旦切れる形は多いが、それらはほぼ「にやあらむ」の省略形である可能性が高い。他の歌10首は「にや」で切れるものはなく、係結は「む(ん)」「べき」「まし」、動詞と呼応する部分を疑い問いかけている。他の歌集を検するにも「にや：らむ・む」などと呼応する例が多く、非融合形の「：にやあるらん」などと詠じたものでも省略はされていないようである。清水氏も井野氏も浮舟歌以外の歌例は挙げておらず、浮舟歌のみを二句切れに解することは歌の調べとしても疑問はあるまいか。しかも、浮舟が「尼衣、変わった身なのか。」と「詠嘆しながら疑問を投げかけ」とすれば、出家し姿は尼衣に変わったが中身は俗世の頃と変わらないと思うからであり、「や」のベクトルは反語の意に向かうのではないだろうか。

反語説の今井上氏は「掛けて」を副詞「かけて」の掛詞と捉え、「尼衣に変わった我が身に、かつてをしのばせる形見として、いまさらこの華やかな衣の袖をかけることなどしようか、いな、そのようなことは「かけて」するまい」と解釈している。副詞の「かけて(も)」は、

⑥ いたくもしたるかな、かけて見およばぬ心ばへよ、

(浮舟⑥ 一七七)

⑦ 紫の雲のかけても思ひきや春の霞になしてみむとは

(後拾遺集卷一〇 哀傷藤原朝光541)

などと用い、『源氏物語』の「かけて」12例中11例は⑥のように下に打消の助動詞・禁止の終助詞などを伴って、決して、全然くない意を表す。また、今井氏が例証とした⑦と同じく、「住吉の神をばかけてわすれやはする」(濤標②三〇五)という反語との呼応例もあるが、浮舟歌は「かけて：や」と呼応する反語の用法ではない。むしろ、従来から指摘される「心にかけて」との掛詞と見るのが妥当である。『万葉集』での「玉だすき かけて惣はむ」(巻二199)なども参照できる。

⑧ かけてのみ見つつぞしのお夏衣うすむらさきに咲ける藤浪 (躬恒集41)

においても、波のように広がる藤の花を薄紫の夏衣に見立て、その夏衣を衣桁に掛けて見ながら、ここの「しのお」はそれを心にかけて賞美する意を詠じている。

浮舟は出家したことで一旦は晴れやかな気持になったが、翌日には入水と出家の二度にわたり人生を棄てたのは、自らの意志であり、時間の推移を辿ることで自然とこうなったのだと、二首連作の手習歌で自らに強く言い聞かせていた。更に、心はうき世の岸を離れたが身は未だ漂泊の尼だと詠じて、心には従わない身を抱えていた。

それから半年を経て、尼の墨染衣を着た浮舟は、自分の法要の布施である華やかな衣を目にして「あはれ」と思ふものの、手にすることは「うたておほゆれば、心地あし」とて手も触れず臥したまへり（手習⑥三二六〇）、過去にいても妹尼に「なかなか思ひ出づるにつけて、うたてはべればこそ、え聞こえ出でね」（手習⑥三六二）と拒否感や嫌悪感を示している。しかし一方では、昔のことは「絶えて」すっかり忘れたと言いながら、このような法要の準備を「ほのかにあはれ」だと語るように、過去に対する屈折した思いがあるからこそ偲ぶことへの躊躇いがあったと思われる。

従って、浮舟歌の構成は「に」は格助詞で、係結「や：ん」によって一首全体を躊躇いながら自らに疑問いかけていると解釈した。疑問説が妥当だと思いが、格助詞「に」と「袖をかけて」の解釈は従来説とは異なる。「身に」という現代語訳は形見の袖を掛ける場所として身を示すのに対し、私見では尼衣に変わった身の状態において偲ぶことの提示と捉えることになる。それは「袖をかけて」との解釈に関わるので、次節で考えてみよう。

三 「袖をかけて」について

「袖をかけて」は当歌解釈の重要な鍵となることばである。通説はいずれもが、墨染の尼衣に変わった身に華やか

な衣を着たり、華やかな衣の袖を掛けたりすることだと解釈するのだが、井野葉子氏は、形見の華やかな衣に浮舟が今着ている墨染の尼衣の袖を掛けることだとの新解釈を提示した。

「かたみに」の本文校異には他に「かたみの」がある。⁸「かたみの袖」ならば、昔の形見である華やかな衣の袖としか解しようがなく、それを尼衣の身に掛けることになる。「かたみに」の本文に拠るなら、〈華やかな衣を形見として、その袖を尼衣の身に掛ける〉とも、〈華やかな衣を形見として、それに尼衣の袖を掛ける〉とも解釈できよう。

「袖」は、露や涙と連繫し「濡る」「しほる」「くたす」の「ごふ」などとの呼応が多いが、「覆ふ」「被く」「顔におしあつ」「振る」「とらふ」などとも承接することから、単なる衣類の部位ではなく、まるで身体の一部であるかのように扱われる。「衣」については、「脱ぎ置く衣を形見と見たまへ」（竹取物語七三）など「形見」と見ること、源氏が空蟬の「いとなつかしき人香に染める」小桂の薄衣を「御衣の下にひき入れ」て寝る（空蟬①二一九―二三〇）という（衣で偲ぶ）例もある。歌では「衣」「かけて」「偲ぶ」は縁語での掛詞として詠われるし、末摘花邸で源氏の使者へ緑の衣を肩に「うつほにてうちかけたまへり」（玉鬘③一三七）の例もある。一方、「袖」を「かく」「うちかく」では、浮舟例の他に各2例用いられている。⁹

⑨ いっししかも袖うちかけむをとめ子が世をへてなづる岩の

おひさき

(落標②二八九)

⑩すべらきのかざしに折ると藤の花およびぬ枝に袖かけて
けり
(宿木⑤四八四)

⑪色まさるまがきの菊もをりに袖うちかけし秋を恋ふ
らし
(藤裏葉③四六一)

⑨は、三年に一度天女が梵天より降りてきて撫でる「劫の石」の仏説を踏まえた『拾遺集』(巻五賀「題知らず」よみ人知らず299)歌を引歌とした源氏詠で、「袖うちかく」は源氏が自らの衣の袖を岩(明石姫君)にうち掛けることに準えて、姫君を愛しみ育むことの比喩表現である。⑩の「およびぬ枝に袖かく」も、薫が帝のかざしを折るために手の届かない藤壺の藤花に自分の袖を掛けてしまったことを、恐れ多くも今上帝の女二宮を妻としたことの喩としてゐる。⑪は、源氏が自らの袖を菊の花に掛けた情景を回想し、「色まさるまがきの菊」に準えた太政大臣(昔の頭中将)も折々に紅葉賀巻で共に青海波を舞ったあの秋を懐かしんでいるでしょうと詠みかけたものである。

『枕草子』にも中宮定子が琵琶に自らの「御袖を打ちかけて」(九〇上の御局の御簾の前にて一七八)という例があり、和歌集でも次のような例が見られる。

⑫春来てはわがそでかけし桜花いまは木高き枝見つるかな

(うつほ物語・楼の上下③六一七、風葉集卷一八雑三うつほのさかの院1336は第五句「かけと見るかな」)

⑬したつ枝に咲かずしもあらず桜花いかでかかけん墨染の

袖

⑭墨染の柳ならずは青柳の緑の袖をかけて見てまし
(長能集121)

⑮袖かけて引きぞやられぬ小松原いづれともなき千代のけ
しきに
(後拾遺集卷一春上源頭房室28)

⑫は、嵯峨院が昔春ごとに京極邸の桜に(わが袖)を掛けたこと。⑬の母の服喪中に下枝の桜花に掛ける墨染の袖は藤原長能の袖であるし、⑭も、藤原公任が着ている六位の袍の深緑の袖を柳(桜とする本文もある)に掛けることを詠う哀傷歌である。⑮源頭房の北の方が子の日に引く小松に掛ける袖も、北の方自身の衣の袖である。

これらの「袖(を)かく・袖うちかく」には、いづれも桜花、柳、小松、岩、藤花、菊、琵琶という袖を掛ける対象が明示され、その上に本人の着ている衣の袖を掛けるのだと言える。しかも、そこには対象への深い思い入れや愛しむ心も垣間見える。従って、浮舟も「形見」と捉えた華やかな衣の上に自らの尼衣の袖を掛けることであり、「袖をかけて」は井野氏と見解を同じくする。

四 「かたみ」と「しのぶ」について

ならば、浮舟は昔の形見である華やかな衣に墨染の尼衣の袖を掛けて何を偲ほうと問いかけているのだろうか。通説は「昔、昔の暮し、俗世のころ」などと言うが、そのよ

うな漠然とした時空であろうか。

「形見」の衣が喚起する「ありし世」は、存在を表す動詞「あり」に過去の助動詞「き」が接続したもので、人を主体として既に在った、確かにその人が生きていた過去の時空を捉えている。布施の（紅に桜の織物の袷重ね）の華やかな装束は浮舟が俗世にあった過去の象徴である。浮舟はこれに触れることを「うたて」と拒んだにも拘わらず、この衣を「ありし世の形見」と見て「形見」が喚起する何か心に惹かれて、ひたすら慕わしく懐かしいと思う気持もあつた。

「形見」は、柏木が手に入れた女三宮の唐猫を「恋ひわぶる人のかたみ」（若菜下④一五八）として撫で養い、源氏は紫上遺愛の紅梅を「かの御形見の紅梅」（幻④五二八）と大切に見、また源氏が薫を「御心ひとつには形見と見な」（柏木④三四一）すのは、唐猫には女三宮を、紅梅には亡き紫上を見出し、薫を柏木の遺児と見るからに他ならない。「形見」は亡き人や遠く離れて会えない人を偲ぶよすがとして、その人に関わり深い品物や人物、動物などを捉えている。人々は「形見」を通して、そこに現前する特定の故人や会うことのできない人に心を寄せて慕わしいと思つていたのである。

浮舟にとって「ありし世」は昔や俗世には違いないが、漠然とした時空を捉えるのでは精確ではない。同例はないので、類似表現を見てみよう。

⑰この御方には、「昔の御形見に、今は何ごとも聞こえ、うけたまはらむとなん思ひたまふる。（後略）」

（総角⑤三三二）

⑱笛は、かの夢に伝へし、いにしへの形見のを、またなきものの音なりとめでさせたまひければ、…（中略）…、取う出たまへるなめり。

（宿木⑤四八一〜四八二）

⑲は、大君亡き後、薫が「この御方」中君に向かつて、あなたを（姉大君の形見）として何事も申し上げ、お聞きしましようと思うことを語るもの。「昔の御形見」は今も薫の記憶の中に生きている亡き大君を特定して、その大君を偲ぶよすがである中君を捉えている。⑱の「いにしへの形見」は、帝が亡き柏木を特定して偲ぶために所望した柏木遺愛の笛を言う。ここでの「昔」「いにしへ」は単なる過去の時空ではなく、薫や今上帝が「形見」を通してまぎまぎと思ひ出して懐かしく思い、心を寄せる大君、柏木を特定して捉えている。浮舟も「かたみ」の華やかな装束が喚起する「ありし世」には、深く心を寄せる特定の人物を想起していたはずである。

「偲ぶ」対象についても次のように考えることができる。

⑲まして、上には、御遊びなどのをりごとにも、まづ思し出でてなむ偲はせたまひける。

（柏木④三四〇）

⑳げにいまひとへ偲はれたまふべきことを添ふる形見なめり。

（明石②二六九）

⑲は、柏木が今上帝の東宮時代に琴を教えるなどして

(若菜下④一五七) 深い親交があったため、帝は柏木の死後にも管絃の遊びの度に柏木を懐かしみ哀惜なざるのだった。⑳は、都に帰る源氏が「さらば、形見にも偲ぶばかりの一事をだに」(明石②二六五)と言ひ残した琴の御琴には源氏の香の染みた身馴れ衣も添えられていた。明石君はその衣を源氏を一層懐かしく思われるに違いない。「形見」のようだ^㉑と見たのである。「形見」は「偲ぶ」ためのよすが・拠り所であり、人々は「形見」と捉える人物・品物などに触発されて、亡き人や離れて会えない愛しい人に心惹かれて懐かしく思っている。

では、浮舟が「形見」から「偲ぶ」特定の人物は誰なのか。浮舟は華やかな装束が自分の法要のために薫が準備しているものであり、薫は私を忘れていないのだと思つたこと^㉒でこの衣を「ありし世のかたみ」と捉えた。この装束に深い思い入れや愛しみを感じており、形見が喚起する特定の人物は薫である。浮舟は尼であるわが身が薫を偲ぶことを躊躇っていた。

因みに、「かたみに」を「形見に」「互に」の掛詞と捉えることで、浮舟が薫とお互いに袖を掛けたり、お互いに偲ぶのだとする倉田実氏、岡陽子氏の見解もある。

㉑ 逢ふまでのかたみに契る中の緒のしらべはことに変わらざらんむ
(明石②二六七)

右では、源氏と明石君双方の認識は一致しているが、尼の浮舟が俗世の象徴である華やかな衣の袖を薫とお互いに掛

けることを想像するだろうか。掛ける袖が浮舟の尼衣であれば、なおさら薫の関与は考え難い。掛詞は、清水婦久子氏や井野葉子氏が提示した「御衣の片身づつ、誰かとく縫ふ」「ゆだけのかたの身を縫ひつるが」(枕草子九一ねたきもの一七九)例を参照し、「尼衣」「袖」の縁語として衣の片方の身ごろである「片身」と見ることに違和感はない。

この浮舟歌がどのような情況を詠じているのかについて考えてみると、この場面で〈紅に桜の織物の袿重ね〉の装束は未だ縫い上げられてはおらず、浮舟は尼たちが縫製するため部屋の床に広げていたものに、自分の着ている尼衣の袖を上からそつと掛けることを幻視したと思う。実際に袖を掛けたのではなく、幻視、幻想するかのごとく思い描いたのである。井野葉子氏が「虚構を許された歌の言葉の中で」の「空想」だと言ふ見解に近い。清水婦久子氏も「想像」したものと捉えるが、薄墨衣に桜の袿を片身掛けている姿だとする点で視覚化される映像が異なる^㉓。

五 かぐや姫引用について

以上のように浮舟歌を解釈した上で、浮舟のかぐや姫引用の視点から考えてみたい。浮舟にかぐや姫の面影を見ることは、宇治での発見時に僧や横川僧都が〈狐の変化〉「木霊の鬼」「女鬼」「物の変化」(手習⑥二八三―二八五)など「変化」のものか^㉔と見ていたし、浮舟を保護した妹尼た

ちは「いみじき天人の天降れる」（手習⑥二九九）と美しさを感嘆し、何よりも妹尼の心境が「かくや姫を見つけたりけん竹取の翁よりもめづらしき心地する」（手習⑥三〇〇）と語られている。浮舟自身も入水に失敗した自分が生きていることを都の誰が知つていようか、誰も知らないこと、都の人々との断絶を嘆く歌を「月のみやこに」（手習⑥三〇二―三〇三）と詠むなど、『竹取物語』引用と見られる表現を多々指摘できる。浮舟にかぐや姫への進えがあつたことは、従来から多くの論考が説くところである¹⁴。

中でも浮舟の「尼衣」については、今井源衛氏が作者は「かくや姫の羽衣と浮舟の僧衣とを暗に対応させ」たのではないかと述べたことが最初であろうか。しかし、「尼衣」歌には触れていない。小林正明氏は『竹取物語』『伊勢物語』による浮舟へのかぐや姫の引用構造を考察し、浮舟歌の「かたみ」は『竹取物語』で「形見」として残されたかぐや姫の「脱ぎおく衣」に対応し、浮舟の「尼衣」はかぐや姫の「天の羽衣」である。「アマゴロモ」が「捨世の象徴」として機能する点も指摘したが、一首の意が反語か疑問かの決定はせず、むしろ「決定不能性」を論じている。

また、神田龍身氏も『竹取物語』『伊勢物語』引用の視点から、浮舟は「天上に迎えとられずに落下したかぐや姫」ではないかと言う。「尼衣」歌については「出家した現在から、かつての自分のことを偲ぶことがあろうか」と、反語の解釈を示している。井野葉子氏は「尼衣」歌を詳細に

論じたが、かぐや姫引用には触れていない¹⁵。

浮舟の「尼衣」はかぐや姫の「天衣」であることが確かだとすれば、かぐや姫の面影はこの最後の歌にどのような意味をもたらしたのだろうか。浮舟は九月の出家時にはまたしてもこの世を棄てた、出家したのだと手習歌で自らに強く言い聞かせていた（手習⑥三四一）。しかし、新年には宇治川の対岸に渡った匂宮との濃密な逢瀬を追想する手習歌を詠み、妹尼とは若菜を摘み共に歳も積もうと新年を寿ぐ贈答歌を交わす。そして、匂宮を「袖ふれし人」と詠じて昨年の春を懐旧し（手習⑥三五四―三五六）、この場面では薫を偲ぼうかと自らに問いかけるなど、浮舟は昔を忘れてはいない。

かぐや姫も「天の羽衣」を着る瞬間には帝を「あはれ」と歌に詠むが、地上世界での「形見とて、脱ぎ置く衣」を残し「天の羽衣」をまとうと、翁を「いとほし、かなし」と思う心も「物思ひ」もなくなり、天上世界の「月の都」に帰って行った（竹取物語七三―七五）。

ところが、浮舟は出家し「尼衣」を着ても、薫が準備する一周忌法要の華やかな装束を「ありし世の形見」と見て、薫への思いに心が揺れる。浮舟の「尼衣」は過去を忘れさせる衣ではなかった。浮舟は尼衣の袖を形見の華やかな衣に掛けることを思い描いて、過去の記憶を手繰り寄せ、薫を偲ぼうかと問いかけていた。「尼衣」歌の解釈を踏まえてかぐや姫引用を読み解くならば、浮舟最後の歌は（脱か

ぐや姫」とでも言える歌であったらう。

おわりに

本稿では浮舟の手習歌「尼衣かはれる身にやありし世のかたみに袖をかけてしのぼん」について、従来説にも拠りながら次の解釈に至った。浮舟は出家し尼衣に変わった身において、床に広げられた昔の形見である華やかな衣の片身に尼衣の袖を掛けることを幻視し、形見が喚起する薫にひたすら心惹かれて懐かしく思うのか、薫を偲ぼうかと自らに疑い問いかけた。尼衣に変わった身にポイントを置いて薫を「あはれ」と思うことへの揺れる心があった。

この歌をかぐや姫引用から見ると、「尼衣」を着た浮舟が自らの内奥にある薫に心惹かれ懐かしむ思いを引き出すことで、かぐや姫との違いは決定的となる。この後物語は薫が浮舟の生存を知り、夢浮橋巻では弟小君を小野に遣わすが、浮舟は小君との対面も薫の文の受け取りも拒否をする。浮舟はかぐや姫ではなかったが、薫との再会や俗世に戻ることもなく、迷いながらも尼として生きるであらう、浮舟物語独自の女君であったと思われる。

注

(1) 『源氏物語』『万葉集』『竹取物語』『枕草子』『うつほ物語』の用例引用はいずれも新編日本古典文学全集に拠る(『竹取物語』

は『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』から)。歌は『新編国歌大観』(角川書店)に拠り表記を改めた箇所がある。用例検索にはジャパンナレッジ『新編日本古典文学全集 源氏物語』も参照したが、次の語彙検索に2例を加えたものを用いた。

<http://genji.co.jp/zenshu-genji-srch.php>

(2)

◆ 『源氏物語古注集成第7巻 内閣文庫本細流抄』(桜楓社1980年)444頁。

◆ 玉上琢彌『源氏物語評釈第十二巻』(角川書店1968年)

528・530頁。『玉上評釈』と略称。

◆ 石田穰二・清水好子『新潮日本古典集成 源氏物語八』(新潮社1985年)248頁。『集成』と略称。

以下も次のように略称した。

◆ 吉沢義則『対校源氏物語新釈巻六』(平凡社1952年、後に国書刊行会)：『対校』

◆ 池田亀鑑『朝日古典全書 源氏物語七』(朝日新聞社1955年)：『全書』

◆ 山岸徳平『日本古典文学大系 源氏物語五』(岩波書店1963年)：『大系』

◆ 阿部秋生・秋山虔他『日本古典文学全集 源氏物語六』(小学館1976年)：『全集』

◆ 柳井滋・室伏信助他『新日本古典文学大系 源氏物語五』(岩波書店1997年)：『新大系』

◆ 阿部秋生・秋山虔他『新編日本古典文学全集 源氏物語⑥』

(小学館1998年)：『新全集』

◆鈴木一雄監修・津本信博編『源氏物語の鑑賞と基礎知識 No.40 手習』(至文堂2005年)：『鑑賞』

◆室伏信助監修・上原作和編集『人物で読む源氏物語第二十七巻 浮舟』(勉誠出版2006年)：『人物で読む』

◆梅野きみ子他『源氏物語注釈十二』(風間書房2018年)：『注釈』

◆柳井滋・室伏信助他『岩波文庫 源氏物語(九)』(岩波書店2021年)：『岩波文庫』

(3) ◆井野葉子「浮舟の最終詠の解釈―二句切れ・疑問・片身・袖をかけ」(『源氏物語 宇治の言の葉』森話社2011年304〜320頁、原題「浮舟の最終詠の新解釈―二句切れ・疑問・片身・袖をかけ」) 小山清文・袴田光康編『源氏物語の研究―宇治十帖を考える』新典社2009年253〜266頁初出。

◆『岩波文庫 源氏物語(九)』(岩波書店2021年) 331頁。

◆倉田実「浮舟の「わが身をたどる表現」論」(『大妻女子大学紀要―文系』第27号1995年3月20頁、『わが身をたどる表現』論―源氏物語の膠着語世界) 武蔵野書院1995年31頁) は、「や」は「感動」と捉える。

◆清水婦久子「源氏物語の和歌―縁語・掛詞の重要性」(『文学』7―5、2006年9月77・81頁) は、「尼衣」を着ただけで「身」が真の尼になりきるわけではなく、「姿こそ「尼衣」であるが、わが身(中身)は本当に変わったのだろうか、かつての俗世を偲ぶよすがとして、この片身に袖をかけて

みようか」と、二句目、句末も二重の疑問に解釈している。

(4) ◆清水婦久子(3)に同じ77頁。
◆岡陽子「浮舟最終詠「尼衣かはれる身にやありし世の…」考―浮舟物語における手習歌の存在意義」(『広島平安文学研究会』『古代中世国文学』16号2000年12月) 2〜4頁。

(5) ◆今井上「浮舟の尼衣―浮舟最後の歌と『源氏物語』作中和歌の意義」(小山清文・袴田光康編『源氏物語の新研究―宇治十帖を考える』新典社2009年281頁)。

◆同「『源氏物語』の注釈的課題と和歌―『源氏物語研究の現状と展望』によせて」(『文学・語学』第193号2009年3月) 71〜73頁。

(6) 「衣」「かけて」は「よひよひにぬぎて我がぬる狩衣かけて思はぬ時のまもなし」(古今集卷二二恋歌二紀友則593) など、衣を衣桁に掛けて、心にかけての掛詞に用いる。

(7) 出家時に「亡きものに身をも人をも思ひつつ棄ててし世をぞさらに棄てつる」「限りぞと思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるかな」「心こそうき世の岸をはなれど行く方も知らぬあまのうき木を」(手習⑥三四一・三四二)と詠む。

山崎良幸「日本語の文法機能に関する体系的研究」(風間書房1965年) 助動詞「つ」「ぬ」 362〜364頁。

(8) 『源氏物語大成第六冊校異篇』(中央公論社1985年)『河内本源氏物語校異集成』(風間書房2001年)『源氏物語別本集成第十五巻』(おうふう2002年)を参照し、略称もそれに拠ると、「かたみに」青(大・榊・二・肖・三)別(陽・池・

阿)「かたみの」河(御・七・尾・平・前・大・鳳・吉・兼・岩)。

現代の注釈書でも『対校』『全書』は「かたみの」、「大系」『玉上評釈』『全集』『集成』『新大系』『新全集』『鑑賞』『人物で読む』『注釈』『岩波文庫』は「かたみに」とする。

(9) なお、「御前の花の木も、はかなく袖かけたまふ梅の香は、春雨の雫にも濡れ、身にしむる人多く、」(句兵部卿⑤二七)の「袖かけ」を『新大系』は「袖ふれ」(句宮四―二二九)とする。

『源氏物語大成第五冊校異篇』(中央公論社1985年)梅野きみ子他『源氏物語注釈九』【校異】(風間書房2012年)に拠れば、青表紙本のく一部に「そてふれ」があるのは、「色よりも香こそあはれと思はゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞも」(古今集卷一春上よみ人知らず33)から異文が生じたのであろう。

(10) 「偲ぶ」「形見」の呼応は全5例ある。『新全集』の「忍ぶ」表記を「偲ぶ」と改めた。「若君を見たてまつりたまふにも、「何に忍ぶの」といど露げけれど、かかる形見さへなからましかばと」(葵②四九)は、『後撰集』(卷一六雑二兼忠母の乳母1187)歌を引歌とし、「形見の子」「筐の籠」、「忍ぶ(草)」「偲ぶ」の掛詞とする。

(11) ◆倉田実(3)に同じ。

◆岡陽子(4)に同じ5頁。

(12) ◆清水婦久子(3)に同じ82頁。

◆井野葉子(3)に同じ306・307頁(初出本255・256頁)。

(13) ◆井野葉子(3)に同じ319・320頁(初出本265・266頁)。

◆清水婦久子(3)に同じ82頁。

(14)

◆日本古典文学全集『源氏物語六』(小学館1976年)288頁。

◆今井源衛「浮舟の造型―夕顔・かぐや姫の面影をめぐって」

『今井源衛著作全集第2巻』笠間書院2004年、『文学』50―7、1982年7月初出)

◆河添房江「源氏物語の内なる竹取物語」(『源氏物語表現史

論と王権の位相』翰林書房1998年、原題「源氏物語の内なる竹取物語―御法・幻を起点として」『国語と国文学』61―7、1984年7月初出)

◆小林正明「最後の浮舟―手習巻のテクスト相互連関性―」

(松井健児編『日本文学研究論文集成6 源氏物語1』若草

書房1998年、『物語研究 特集・語りそして引用』新時

代社1986年初出)

◆小嶋菜温子「浮舟と(女の罪)―ジェンターの解体」(『源

氏物語批評』有精堂1995年、原題「源氏物語の構造―

浮舟とかぐや姫―」『国文学 解釈と鑑賞』56―10、199

1年10月初出)は、「昇天できない、かぐや姫」である浮舟

の「あまごろも」は「罪」のメタファーだと言う。

◆井野葉子「竹取引用群―浮舟巻を中心に、そして柏木・夕

霧物語」(3)『源氏物語 宇治の言の葉』に同じ、原題「源

氏物語における竹取引用群―浮舟巻を中心に、そして柏木、

夕霧物語―」『平安朝文学研究』復刊第7号1998年11月)

は、浮舟の「尼衣」がかぐや姫の「天の羽衣」ではないこ

とに触れている。

◆長谷川政春「さすらいの女君(二)―浮舟」(『物語史の風景』

若草書房1997年)

◆橋本ゆかり「『源氏物語』における挑発する（かぐや姫たち）パロールとエクリチュールと記憶」（『源氏物語の（記憶）』翰林書房2008年）

◆神田龍身「源氏物語の終り方―浮舟―落下したかぐや姫」

（久保朝孝編『危機下の中古文学2020』武威野書院2021年）

(15)

◆今井源衛（16）に同じ187頁（初出本58頁）。

◆小林正明（16）に同じ106～107頁（初出本91～92頁）。

◆神田龍身（16）に同じ171～172頁。

◆井野葉子（3）に同じ。

（やまざき かずこ・元本学兼任講師）